

日本アンダーライティング協会 第86回教育講習会

生物学的製剤による皮膚科の進化紹介

日本アンダーライティング協会は昨年12月17日、第86回教育講習会をオンラインで開催した。講師に第一生命契約医務部医事統計課主任医長の藤澤裕子氏を迎え、「生物学的製剤と皮膚科治療のパラダイムシフト」をテーマに講演が行われた。講習会はライブ配信およびアーカイブ配信で実施された。

講演は、①皮膚とは②皮膚科学とは③皮膚科診断学④皮膚科の治療法⑤皮膚科の新しい治療法、生物学的製剤の5部構成で行われ、皮膚科の治療が生物学的製剤の登場により大きく転換したことについて、具体事例を通じて

紹介された。皮膚科学では視診や組織診を中心とする診断学が早くから発展し、多くの疾患が定義されてきた一方、治療は外用ステロイド剤を主体とする対症療法が中心で、根本治療が乏しい分野とされてきた。しかし、21世紀に入り、生物学的製剤の登場により、皮膚科治療は大きな転換点を迎えた。生物学的製剤は、免疫

反応に関与する特定のタンパク質やサイトカインを標的とし、免疫の異常部分のみを選択的に抑制する薬剤であり、講演では、治療が大きく変化した疾患として、乾癬、アトピー性皮膚炎、天疱瘡の3疾患が紹介された。乾癬は最初に生物学的製剤が承認された疾患で、病態としては、免疫細胞由来のサイトカインが炎症を増幅させ、表皮

細胞のターンオーバーが著しく短縮する。現在は8種類の生物学的製剤が使用可能で、TNF- α 阻害薬に始まり、より下流で限定的な分子を標的とすることで、有効性の向上と副作用低減が図られている。直近で生物学的製剤が承認された天疱瘡では、自己抗体を産生するBリンパ球が病態の中心であり、従来治療は大量ステロイド療法や血漿交換療法が主流だったが、生物学的製剤リツキシマブにより、疾患の根本原因に直接作用する治療が可能となり、長期寛解や治療も期待されている。

生物学的製剤は、外用負担や入院・通院回数の減少、副作用低減を通じて患者の生活の質を大きく改善する。皮膚科は免疫機構そのものを調節できる治療領域へと進化し、「治らない慢性疾患」から「社会生活と両立できる疾患」へと位置付けが変わりつつある。藤澤氏は最後に、「本講演を通して、多くの皮膚科患者を救ったこのパラダイムシフトにおける感動を、アンダーライターの皆さまにも感じただけならこんな幸せなことはない」と述べ、教育講習会を締めくくった。

(文責：日本生命契約部 林藤友紀)



本記事を執筆した林藤氏

細胞のターンオーバーが著しく短縮する。現在は8種類の生物学的製剤が使用可能で、TNF- α 阻害薬に始まり、より下流で限定的な分子を標的とすることで、有効性の向上と副作用低減が図られている。直近で生物学的製剤が承認された天疱瘡では、自己抗体を産生するBリンパ球が病態の中心であり、従来治療は大量ステロイド療法や血漿交換療法が主流だったが、生物学的製剤リツキシマブにより、疾患の根本原因に直接作用する治療が可能となり、長期寛解や治療も期待されている。

慢性疾患も社会生活と両立できる疾患に